

# 高等学校「古典B」—和歌を主体的、対話的に学ぶ試み—

—「ほととぎす」「雁」を手がかりに—

国語科 横井 健

次期学習指導要領において新設される「言語文化」および「古典探究」では、古典に親しむとともに様々な古典作品に触れ、我が国の言語文化に対する考えを深めることが求められている。現行課程の「国語総合」や「古典B」の内容を深化させたものと理解することができる。しかしながら、「古典探究」を選択しなかった場合、古典文学を教材とした授業が表面的で浅薄なものにとどまってしまう恐れもある。「古典B」の授業を改善、発展させることで、次期指導要領実施に向けた古典文学を用いた授業の可能性について考えたい。

<キーワード> 和歌 古典B 和泉式部日記 源氏物語

## 1 はじめに

現行の学習指導要領の国語総合「古典の教材」の配慮事項には、「注釈、傍注、解説、現代語訳などを適切に用い、特に漢文については訓点を付け、必要に応じて書き下し文を用いるなど理解しやすいようにすること」と記されている。この記述は新指導要領の「言語文化」にもそのまま踏襲されており、古文と漢文について、まずは理解しやすく親しみやすくすることが引き続き重視されていることが分かる。一方で、「古典探究」の指導について、「生徒の主体的・対話的で深い学びを図るようにすること。その際、言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、言葉の特徴や使い方などを理解し自分の思いや考えを深める学習の充実を図ること」という、これまでの「国語総合」、「古典B」では見られなかった記述が設けられ、古典の読解を生徒自身の課題や自身の価値観と結びつけて思考し、言語化させる授業が要求されている。一方で、科目の変更（および標準単位数の変更）に伴って、「古典探究」を選択できなかった場合、平易な古典作品を表面的にしか学ぶ機会が無いという状況が生じることも懸念される。

そこで、古典に親しむべく、「生徒が言葉の面白さを感じながら作品を読み進め、現代語訳に必要なときに助動詞の使い方を学ぶような授業」（高木展郎氏・註1）を展開しつつ、古典文学での学びを「主体的・対話的で深い学び」へと繋げる試みを提案する。なお、対象としたのは本校の3年生文系生徒である。

## 2 学習材名

### (1) 中心学習材

『和泉式部日記』『薫る香に』、『源氏物語』『須磨』（ともに大修館書店『古典B 古文編』。以下、「教科書」と称す。ただし、『和泉式部日記』は小学館『新編日本古典文学全集 26』の注釈に基づいたワークシートを配付。後掲資料参照）

### (2) 関連学習材

『古今和歌集』（岩波書店『日本古典文学大系 古今和歌集』から、「ほととぎす」および「雁」が用いられている和歌を授業者が抜粋。該当歌の前後も含む。）

### 3 『和泉式部日記』の実践について

教科書の「薫る香に」において、欄外に掲げられている重要古語は「世の中」、「なごり」、「つつまし」、「あだあだし」、「気色ばむ」、「ゆめ（…な）」の6つである。いずれも3年生にとって難しい単語ではなく（本校で1年次から使用している数研出版『古文単語マスター333』に「なごり」以外は全て収録されている）、辞典で調べずとも直訳はできるくらいの古文である。そうであれば、通常の単元で現代語訳に費やしている時間を探究活動に充てるべく、ワークシート（後掲）を使用し、現代語訳は予め提示することとした。ありがたいことに藤岡忠美氏の注釈には「薫る香によそふるよりはほととぎす聞かばやおなじ声やしたると」の現代語訳に「ほととぎす」が訳出されておらず（註2）、なぜ現代語訳する際に直接的には必要ない「ほととぎす」が和歌で用いられているのか考えるための良いきっかけとなった。

さて、「ほととぎす」がどのような鳥で、和歌の世界でいかに詠まれてきたのかについては、おおよその定説がある。例えば手元にある三省堂『全訳読解古語辞典』を繙くと、「鳥の名。かっこうに似ているがやや小型。初夏に渡来し、うぐいすなどの巣に卵を産んで、ひなを育てさせる。秋に南へ去るのを山に帰ると考え、『山ほととぎす』とも呼んだ。また、『死出の田長』とも呼ばれ、冥土へ通うと考えられた」（註3）との記載がある。国文学に関心がある人であれば、正岡子規を連想することであろう。情報としては十分である。しかし、辞書的な意味を理解し、覚えたからといって「ものの見方、感じ方、考え方を広くし、古典についての理解や関心を深めることによって人生を豊かにする態度を育てる」（註4）ことになるとは言い難い。ほととぎすの鳴き声は現代でも聞くことができるので、「ほととぎす」の解釈を通して、和歌の表現について学ぶとともに、先人のものの見方や感じ方を追体験させることを目指した。

例えば敦道親王が和泉式部に橘の花を届けさせる場面について、教科書の脚注に「昔の人の…『古今集』夏に『さつき待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする』（詠み人知らず）とある」とある。これをもって学習者は、和泉式部日記の記述に古今和歌集の影響があり、作中人物が古今集の世界と同じ感性を持っていたことを類推することになる。「ほととぎす」についても同様であるとするならば、『古今和歌集』で詠まれた「ほととぎす」を解釈し、その意味を理解することが『和泉式部日記』の理解に有効であろう。

なお、『古今集』夏部を題材として、「ほととぎす」が持つ歌語としての意味に気づかせる取り組みは、筑波大学附属駒場高等学校の杉村千亜希氏による優れた実践がある（註5）。ある程度のまとまった分量の和歌を読ませ、分析させる手法は杉村氏の実践を大いに参考にさせて頂いた。

### 4 『和泉式部日記』授業の実際

- 1 本文を音読し、「薫る香に」の内容を読み取る。語句の意味に注意し、指示語などを発問しながら、ワークシートの空欄補充をさせる。また、人物関係を確認し、その背景について整理させる。また、教科書の脚注にある「さつき待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」を口語訳し、和泉式部が橘の花から何を感じ取ったのかを考えさせる。（2時間）

2 「ほととぎす」の意味について考えさせる。数名に指名し、答えさせる。「語調を整える」、「季節を感じさせる」という回答が聞かれた。ほととぎすの声にも着目させるため、電子辞書を用いて、「ほととぎす」の鳴き声を聴かせた（註6）。ほととぎすの意味について、改めて周囲の生徒同士で話し合わせ、授業の趣旨説明を行う。すなわち、『古今和歌集』で詠まれている「ほととぎす」の意味、効果について分析・整理すること、それが『和泉式部日記』でどのように使われているかについて考え、交流することを指示し、『古今和歌集』のプリントを配付する。グループに分かれ、相互発表の後、意見交換を行い、個々の考えを深めさせる。グループ学習の振り返りとともに、話し合いで解決しきれなかった疑問についてまとめさせる。（2時間）

3 グループ代表にまとめを発表させ、意見の合致を確かめ、それぞれの疑問を共有させる。学習したことのまとめと振り返りを記録させる。（1時間）

## 5 『源氏物語』「須磨」の実践について

先の「薫る香に」の実践を受け、「須磨」では「雁」をめぐる実践を行った。「須磨」については、「薫る香に」と異なり、重要古語も多く、作品の舞台も都から須磨に移り、所々に回想場面も挟まれているため、内容の理解に時間がかかる。それゆえ、従来の授業では逐語訳に終始してしまうきらいがあった。ただし、教科書の「学習」の項目に、「渡ってゆく雁にちなむ四首の歌は、それぞれ詠んだ人のどのような気持ちを表しているか、まとめてみよう」という示唆に富む課題があり、こちらを利用することで授業を組み立てることにした。なお、四首の歌は以下の通り（便宜上、番号を付した）。

- 1 初雁は恋しき人のつらなれや旅の空飛ぶ声の悲しき
- 2 かき連ね昔の人ぞ思ほゆる雁はその世の友ならねども
- 3 心から常世を捨てて鳴く雁を雲のよそにも思ひけるかな
- 4 常世出でて旅の空なる雁がねも列におくれぬほどぞ慰む

例えば、教科書の「指導資料」の解答例では、1の源氏の歌にこめられた気持ちは、「都に残してきた人々の悲しみを思いやる気持ち」（註7）とされており、「雁」への言及がない。しかし、四首の歌が「雁」のイメージを変容させながら読み手の心情を託していることは明白であり、「雁」の解釈を避けて読み手の「気持ち」に迫ることはできないだろう。教科書の脚注「初雁 秋、はじめて渡ってきた雁」との記述、および「参考」として示されている「思ひ出でて恋しき時は初雁のなきて渡ると人知るらめや」を手がかりに、平安時代の「雁」の持つ意味について考えさせ、「気持ち」の理解を深めさせる試みを行った。

## 6 『源氏物語』「須磨」の授業の実際

- 1 本文の読解・逐語訳。予習を前提に進める。主語を確認し、内容把握に努める。重要古語や敬語の確認は怠りなく行い、定着を図る。和歌の解釈については、直訳にとどめておく。（4時間）
- 2 「雁」の意味について考えさせる。数名に指名し、答えさせる。ほととぎすと同様に、鳴き声（雁

が音)にも着目させるため、タブレットを用いて、「雁」の鳴き声を聴かせた(註8)。雁の意味について、改めて周囲の生徒同士で話し合わせ、授業の趣旨説明を行う。すなわち、『古今和歌集』で詠まれている「雁」の意味、効果について分析・整理し、『源氏物語』でどのような効果を上げているかについて考え、読み手の「気持ち」を考えることを指示し、『古今和歌集』のプリントおよびワークシート(後掲)を配付する。以下は『和泉式部日記』の実践と同様である。(1時間)1学期に上記「4」の実践を行っていたため、円滑な授業運営が可能となった。

3 『和泉式部日記』の実践に同じ。(1時間)

4 生徒の声(ワークシートの記述から抜粋。傍線は筆者)

#### 【考えたこと】

- ・人のつらさや恋しさを雁の鳴き声や様子でたとえている。
- ・悲しみやつらさを鳴き声で表す。
- ・恋しい人との遠さや悲しさを、雁を使って表現している。
- ・雁は秋を感じさせる鳥。
- ・『源氏物語』では人物と雁が同じ境遇にいてつらさを共有するような仲間意識が見えるが、『古今和歌集』の歌では人物と雁の関わりが見えなかった。
- ・雁を使うと秋の悲しさが大きくなる。

#### 【話し合いを経ての修正・付け足し】

- ・源氏の置かれている状況が決していいものではなかったため、「悲しい」「つらい」といった意味がこめられている雁を歌に使うことで心情を伝えようとしていることが分かった。
- ・『源氏物語』の和歌では「秋」が感じられなかった。
- ・「雁」が人の消息を表しているらしい(古今集206、207)
- ・『源氏物語』の四首の歌は、雁から「秋の訪れ」、都に帰れない悲しさ、鳴く音から「泣く声」など、雁から連想されるほとんどの感情が入っていると感じました。
- ・雁は単に遠いものを表すのではなく、遠いものに思いを寄せることの象徴として使われている。
- ・雁を見かけただけで様々な連想をしたり、自分の思いに重ねてみたり、当時の人たちは私たちよりもセンシティブで感性が豊かだったのだなあと思わされた

重複する内容を省き、寄せられた声は上記のようなものであった。『古今集』との比較を通して、当時の人々の感性に思いをはせるとともに、「須磨」の四首にこめられた詠み手の「気持ち」に迫ることが多少なりともできたように思う。

## 7 まとめ

「ほととぎす」、「雁」という鳥を手がかりに、和歌を読み比べることで『古今集』の歌がどのように後の人々に理解され、共有されていたのかを考える実践を行った。いずれも鳥の鳴き声を生徒に聴かせるところから探究的活動に入ったが、これは柳澤良一氏「きりぎりす考—虫の文学史の試み—」に触発されたものである。柳澤氏は平安・鎌倉期の和歌や注釈書を整理・検証し、「これらの用例を総合・検討

してみると、平安・鎌倉期の和漢文学では、『きりぎりす』が『蜚』『蟋蟀』と表記されること、秋から冬にかけ、霜の降りるような寒い夕方や夜に、物思いの辛さを一層かきたてるような切々とした悲しい声で鳴き、例えば『つづりさせ』と言っているかのように、また機を織る音のようにかんだかく寒さを催す響きとして、人々に聞こえたということなどが分かる」（傍線は引用者。註9）とまとめている。柳沢氏のような研究者の水準までは到達できなくとも、「ほととぎす」や「雁」の鳴き声が、当時の人々にどのように聞こえていたかを想像し、検証し、まとめた上で、一定の理解を共有することを期待した。

もっとも、和歌の解釈は生徒にとって簡単なものではなく、注釈頼みだった面も否めない。ただ、読み比べの中で、注釈の口語訳が腑に落ちず、文法事項に立ち返って解釈を試みる生徒の姿も見られ、古典への関心を高めることに繋がったと考える。また、グループ学習を通して、他者の解釈と自身の解釈を比較することで、古典の解釈にとどまらず、周囲の環境に対する感受性の違いについて考えるきっかけにもなった。現代を生きる生徒同士との対話、先人たちとの対話を通し、より深い学びを実現することが、文学作品そのものの読解よりも「『話や文章に含まれている情報の扱い方』に主眼が置かれている」（紅野謙介氏 註10）きらいのある次期学習指導要領の方針の中にあつて、古典文学で学ぶことの意義に繋がるとあらためて認識した次第である。

註1 高木展郎「カリキュラムマネジメント・国語」 「河合塾 Guideline」平成30年7・8月号 p.40

註2 藤岡忠美校注『新編日本古典文学全集 26 和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』小学館 平成6年9月 p.18

註3 『全訳読解古語辞典』第三版 三省堂 平成21年11月 p.1084

註4 学習指導要領「古典B」 目標

註5 筑波大学付属中・高等学校国語科「〈他者〉と関わる力を育てるための『読むこと』の学び」『筑波大学附属駒場論集 第55集』平成28年3月 p.7

註6 例えば、シャープ製 Brain 所収の『広辞苑 第六版』にはNHK サービスセンター提供の音声収録されている。

註7 『古典B 指導資料4』第3刷 大修館書店 平成28年4月 p.61

註8 サントリー「日本の鳥百科」を利用した。

<https://www.suntory.co.jp/eco/birds/encyclopedia/detail/1491.html>

註9 柳澤良一 「きりぎりす考—虫の文学史の試み—」『東京大学国語国文学会 国語と國文學』至文堂 平成9年11月特集号 p.15

註10 紅野謙介『国語教育の危機』ちくま新書 平成30年9月 p.100

三年生「古典B」 『和泉式部日記』「薫る香に」

夢よりもはかない世の中を、嘆きわびつつ明かし暮らすほどに、四月十余日にもなりぬれば、木の下くらがりもてゆく。築地の(一)上の草あをやかなるも、人はことに目もどめぬを、あはれとながむるほどに、近き透垣のもとに人のけはひすれば、たれならむと思ふほどに、故宮にさぶらひし小舎人童なりけり。

あはれにもののおぼゆるほどに來たれば、「ながく久しく見えざりつる。遠ざかる昔のなごりにも思ふを。」など言はすれば、「そのこととさぶらはでは、なれなれしきさまにやと、つつましくさぶらふうちに、日ごろは山寺にまかりありきてなむ。いとたよりなく、つれづれに思ひたまうらるれば、御代はりにも見たてまつらむとてなむ、帥宮に参りてさぶらふ。」と語る。

「いとよきことにこそあなれ。その宮は、いとあてにけけしうおはしますなるは。昔のやうにはえしもあらじ。など言へば、「しかおはしませど、いとけ近くおはしまして、『常に参るや。』と問はせおはしまして、『参りはべり。』と申しさぶらひつれば、『これも参りて、いかが見たまふとて奉らせよ。』とのたまはせつる。」とて、橋の花を取り出でたれば、「昔の人の」と言はれて、「さらば参りなむ。いかが聞こえさすへき。」と言へば、ことばにて聞こえさせむもかたはらいたくて、「なにかは。あだあだしくもまだ聞こえたまはぬを。はかなき言をも。」と思ひて、

薫る香によそふるよりはほととぎす聞かばやおなじ声やしたると  
と聞こえさせたり。

まだ船におはしましけるに、この童、隠れのかたに気色ほみけるけはひを御覧じつけて、「いかに。」と問はせたまふに、御文をさし出でたれば、御覧じて、

おなじ枝に鳴きつつをりしほととぎす声は変はらぬものと知らすや

と書かせたまひて、賜ふとて、「かかること、ゆめ人に言ふな。すきがましきやうなり。」とて、入らせたまひぬ。もて來たれば、をかしと見れど、常はとて御返り聞こえさせず。

・ 築地 泥土を盛って築いた障。雑草が生える。

・ 疎聞定葉歌『新編日本古典文学全集 和泉式部日記』(小学館)に基づいて、原文に明示されない内容を削除し、意訳を改めたもの。

夢よりもはかない人の世のことを、嘆きわすらいながら夜を明かし日を暮らしているうちに、四月十日過ぎにもなったので、木々の葉陰の闇がしたいに濃くなっていく。築地の上の草が昔々としているのも、他人はことさら目もくれないけれど、身にしみて眺められていたそのときに、厩先の透垣越しに人の來た気配があるので、誰かしらと思っていると、亡き宮にお仕えしていた小舎人童であった。

(一) もの思いのされるときに來たので、(一) (一) 長い間見えなかったの。遠ざかつていく思い出のよすがとも思っているのに「などと言わせると、「これといった用事がございませんでは、なれなれしいやうでと遠慮しておりましたし、近頃は山寺詣でに歩き回って。たいそう所在なく」(一) (一) ので、お身代わりにお仕え申し上げようと、帥宮様にご奉公いたしております」と語る。「たいそいいいお話」(一) (一) 。その宮様はたいへんお上品で親しみにくくいらっしやるてね。前の宮様のようではおありになりませんまい」などと言うと、童は、「そうではいらっしやいますか、たいそう身近にいらっしやって、『いつもお伺いするのか』とお尋ねになりました、『伺います』と申し上げますと、『これを持って何って、どうご覧になりますかと差し上げなさい』とおっしゃいます」と言って、橋の花を取り出したので、「昔の人の」と思わず口ずさまれ、「では帰参いたしましたよう。どうご返事申し上げますましうか」と言うので、文章で申し上げるのも気が引けるし、「なあに、淨氣という評判もまだ立っておられないのだから。とりとめのない和歌ぐらい」と思つて、  
橋の薫る香りに(一) (一) を(一)かこつたりなさるくらいなら、(ほととぎす)、お聞きしたいものです。同じ声をしているかどうかと。

とご返事を申し上げさせた。  
まだ縁先にいらっしやったときにこの童が物陰で意味ありげな合図をしたのでお見つけになって、「どうであった」とお尋ねになるので、お手紙を差し出すと、ご覧になって、  
同じ一つ枝に鳴いていたほととぎす。声は変わらないものと分かりませんか。

とお書きになって、くたさるときに、「こんなことはけつして人に言うなよ。色事好きに見えるやうである」と言つて、お入りになつた。持つてきたので、おもしろく見たけれど、いつもはと思つてご返事はさし上げなかった。

『源氏物語』 「須磨」

三年

組

番 氏名

次の和歌について考えてみましょう。

初雁は恋しき人のつらなれや旅の空飛ぶ声の悲しき

かき連ね昔のことぞ思ほゆる雁はその世の友ならねども

心から常世を捨てて鳴く雁をたびのよそにも思ひけるかな

常世出でて旅の空なる雁がねも列におくれぬほどぞ慰む

歌番号	「雁」の詠まれ方（こめられた意味）

共通点

【考えたこと】

「源氏物語」との共通点と相違点

違い

【話し合いを経ての修正・付け足し】